

「色彩学」ことはじめ

緒方 康二 夙川学院短期大学

「色彩学」を造形教育の一環としてカリキュラムに位置づけたのは、京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）図案科がはじめてであろう。高等工芸学校の創立は明治35年であるが、明治38年のカリキュラム改定にともない、図案科の科目に新たに「色彩学」が登場している。カリキュラム改定の中心人物は、イギリスでの留学を終え帰国した建築家武田五一である。

武田は東京帝国大学工科大学造家科の出身、工科大学助教授に在職中に新設予定の高等工芸学校図案科教員候補として、「図案学研究」を目的として文部省から留学を命ぜられる。留学にあたっては単に専門を深く研究するのみならず、帰国後は「学科ノ授業ノ細目ヲ選定シ」「本校将来ノ盛衰八氏ノ経営ニ」ゆだねるという、莫大な責務が課せられていたのである。留学期間は明治34年から30年までであった。

留学の成果を踏まえ、図案科のカリキュラムに意欲的に導入されたであろう「色彩学」は、『京都高等工芸学校初十年成績報告』によれば物理光学から色覚異常の問題、当時の表色系の紹介、色の命名法、色彩調和、色彩心理、色彩史、色彩文化まで、全14項目にわたる詳細な内容を構成する。日本初の色彩学文献である矢野道也の『色彩学』が明治40年の刊行であることを思えば、武田の「色彩学」がいかに画期的であったかが知れよう。ただカリキュラム改訂の明治38年（1905）は、マンセルが『カラー・ノーテーション』によって独自の表色系を発表した年でもある。従って表色系の紹介にシェブルールほか、ドイツのベゾルト、イギリスのベンソンなど、今日あまり馴染みのない名が連なるのはやむを得ない所であろう。

勿論「色彩学」は実習と連動していた。現在京都工芸繊維大学には、武田が指導したであろう色彩実習作品もいくつか残されている。パウハウスにおけるイッテンの画期的な色彩教育が1919年に始まったことを思えば、武田の「色彩学」の先見性は高く評価されてよいのではないかと思う。

陰陽五行説—龍と色彩—

岡崎 信雄 イオン工学センター

平安建都1200年、過日、NHKのTVで“よみがえる平安京”という番組が放映された。平安京は陰陽師が風水思想により選定した理想の地、龍脈と呼ばれる東山、北山、西山に囲まれ、東に青龍、西に白虎、北に玄武を配し、桂川、鴨川が合流する南に朱雀を配位する。龍脈が発する“気”は風水の如しと言う。

この風水思想に現れる青龍、白虎、朱雀、玄武は陰陽五行説の四神である。陰陽五行説は『陰』『陽』の五気が天地を創造し、陽は天となり、陰は地となると説く。この陰と陽の相互作用が、天に日、月、星を生じ、地に木、火、土、金、水の五気（元素）を生じた。この五元素の相互反応が地上を支配する。この五気には色彩、季節、方位、天地四方を支配する四神などの事象、事物に配され、森羅万象を支配する。

五気	木、	火、	土、	金、	水
五色	青、	紅、	黄、	白、	黒
五方	東、	南、	中央、	西、	南
五時	春、	夏、	土用、	秋、	冬
四神	青龍、	朱雀、	白虎、	玄武	

この配位を眺めていると2000年前に作られた思想が、現代においても理に適っているように思われる。

龍姿と龍形を彩る色彩は、青、黄、紅である。青は活潑な生命現象を現す草木生成の色であり、青龍は万物に生氣を与える象徴であろう。黄は大地を象徴し、方位の中心であり、色の中心に位置する。金龍は大地を支配する権力の象徴である。紅は太陽が南天にあり、紅火の如く大地を照らす。紅事は吉事、結婚式をさし、紅龍は吉兆を象徴する。白の方位は太陽がしずむ西に在り、暮色であり、秋、落陽の季節である。白事は不幸事、葬式をさす。

青龍の青は日本の緑色である。緑は唐三彩の黄緑に近い。青は藍、赤は紅である。同文同種とは言え、多少とも色の表示に違いがあるようだ。